

News Letter Vol.2 No.2

平成7年5月25日 発行

発行人 花嶋正孝

事務局 日本技術開発(株)

〒164 東京都中野区本町15-33-11
中野清水ビル

TEL 03-5385-5111 FAX 03-5385-8515

LS研ニュースレター

最終処分場技術システム研究会

第2回総会開催

最終処分場技術システム研究会の平成7年度定時総会が4月20日(木)にホテルエドモントにおいて開催された。議案は次の通りであり、各議案とも満場一致で承認された。

第1号議案 平成6年度の活動報告および収支決算報告

第2号議案 平成7年度活動計画案および収支予算案

第3号議案 会則変更

以上の議案に引き続き、新規入会および退会会員の報告が行われ質疑応答の後閉会した。

質疑応答では、研究会の活動期間についての質問に対して、研究会としては現在研究しているテーマについては3年間を目処とするが、その後は研究課題がまだあり、研究を続ける意欲のある会員企業があれば3年間にこだわらず会は続ける予定であり、また将来は廃棄物学会の一組織として組み入れられることも考えられるという代表の意見であった。

花嶋代表基調講演



総会に引き続いて花嶋代表による基調講演が行われた。この基調講演は研究会会員の技術レベルの統一向上を図る目的も兼ね約一時間にわたり行われたものである。

基調講演は、最終処分場を取り巻くわが国の廃棄物

処理事情を皮切りに、準好気性埋め立てに至るまでのわが国の最終処分場の歴史、ドイツにおけるガス処理技術及び、イギリスやオランダにおける水処理技術を中心とした海外における最終処分場の事例等がスライドを中心にわかりやすく行われた。更に、クローズドシステムに代表される新しい処分場の考え方、地下水汚染や土壌汚染の修復に関する新技術の紹介、福岡大学で実施されている各種実験(高塩類対策、覆土代替材等)の概要を説明し、最後に研究会の今後の課題として、とにかく検討すべき課題が多いので処分場に携わっている種々の企業が協力して具体的な成果を目指して活動を行う必要があるというアドバイスがあり、終了した。

平成6年度研究発表会

総会の午後には、平成6年度の発表会が行われた。発表会は田中副代表の司会のもと、4研究グループ毎に行われ、各グループリーダーの総括のあと分科会主査による活動報告及び研究発表が行われた。

参加者も約160人以上にのぼり、非常に活発な発表が行われた。

各研究グループの総括は次の通り。

システム計画研究グループ

リーダー：古市 徹

最終処分場の問題をシステムとして把握し、計画策定に結びつけていくプロセス(システム計画)について研究している。このとき、廃棄物の質と量の両面から考え、処分場機能・リスク管理・計画策定の3軸を評価視点としている。つまり、まず“場”としての処分場の持つ機能について考

え、次に廃棄物の“流れ”に注目して廃棄物の質の観点からリスク管理を考え、最後に質と量の両面から処分場機能とリスク管理を考慮したシステム計画を、立地計画・施設整備計画・管理計画の総合計画プロセスとして考える。

3分科会の発表内容としては、リスク管理分科会はリスクの同定と制御を、処分場計画論分科会は処分場計画の総合化を、情報管理分科会は処分場に関する情報管理システムの構築をめざし、研究課題の抽出と次年度研究計画に言及する。

いずれにしても本研究グループは、他の研究グループ（ハードの設計・施工・管理）のための前提条件に係わる部分であり、各分科会はグループ内のみならず、他研究グループとの連携を重視している。

「構造研究グループ」

リーダー：樋口壯太郎

構造研究グループは6つの分科会より構成される。「浸出水処理システム分科会」は浸出水処理に関連する技術の課題を整理するためアンケート調査、文献調査を行い、得られた知見を整理し発表した。「しゃ水システム分科会」は浸出水の低減と集排水ならびにしゃ水シート設計、施工上の問題点を検討し、その結果を発表した。「シート規格分科会」は材料規格と試験方法を調査、整理するとともにシートの要求品質、シート試験の前提条件について調査した結果を、「シート固定工分科会」は固定工の考え方、固定の現状、技術研究の現状を調査検討し8種類のシートを選定し、基礎技術検討を行った結果について発表した。「下地性状分科会」はアンケート調査、文献調査により下地の実態を整理把握し、下地試験実験計画を含めて発表した。「施設構造分科会」は貯留構造物の計画、設計上の課題を整理し、その現状をアンケート調査、文献調査結果によりまとめ、その結果を発表した。

「施工研究グループ」

リーダー：押方利郎

施工研究グループは、①シート試験方法②シート施工③基盤整備・法面施工および④施設施工の4分科会から構成されている。平成6年度は以下の内容について検討した。

①シート試験方法分科会は、シート材料として

の特性試験法ではない処分場に適用する応用試験法のとりまとめを目指して研究している。今年度はしゃ水工破損事例と破損要因の調査・整理、既存試験法の整理、処分場に対応した試験法および装置の検討を行った。

②シート施工分科会は、施工基準およびシート施工後の検査基準のとりまとめを目指して研究している。今年度はシート施工の現状把握とシート施工基準の整理・検討を行うために特許、文献並びにアンケート調査を実施した。

③基盤整備・法面施工分科会および④施設施工分科会は、最終処分場の基礎地盤や貯留構造物、浸出水集排水施設などに係わる施工および施工管理技術のとりまとめを目指して研究している。今年度は文献並びにアンケート調査を実施し、現状の技術基準の整理と問題点の抽出を行った。

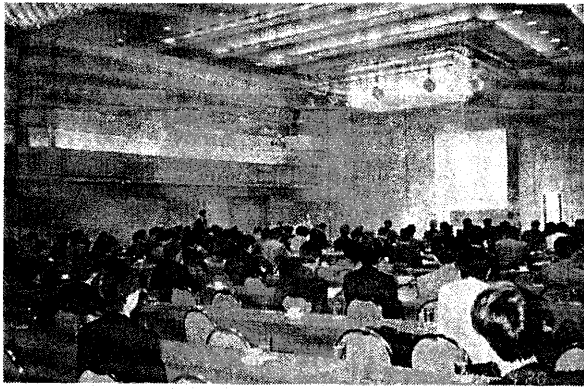
「維持管理研究グループ」

リーダー：堀井安雄

近年の生活スタイルの変化、廃棄物処理法の改正等により、最終処分場に搬入されるごみ質も年々変化している。また、排水基準が強化されるなど、処分場を取り巻く環境が、急激に変化している。処分場の維持管理は、埋立期間はもちろんのこと、埋立終了後の跡地についての管理や閉鎖についても検討が求められてきている。

本研究グループは、このような観点に立って、研究内容を「埋立管理」「水質管理」「施設管理」に分けて、並行して研究を行った。適正な維持管理や跡地利用を行うためには、最終処分場を構成する各施設の機能を十分に把握し、現状の課題を明確にしなければならない。そのため、初年度の活動としては、各分科会共に、文献調査、トラブル事例を主体とした実状調査を実施して、管理に関する問題点の抽出に重点を置いて、研究を進めた。また、グループ内の3分科会について、横の連携をとるために、主査会並びに、グループ総会を行って、グループ全体の研究方針を議論した結果、3ヶ年の研究期間で、維持管理に関する指針作成を目標に、設計指針にもつながる研究成果を残すべきであることが示された。

平成7年度以降は、その具体化のために本年度と同様「埋立管理」「水質管理」「施設管理」の3分科会で並行して研究活動を進めて行く予定で



ある。

また、活動報告書としても次に示す資料が提出された。

- 1) 平成6年度分科会活動報告書
- 2) LS研参加企業最終処分場関連技術資料集
- 3) 分科会報告書
 - ①処分場計画論（文献調査抄録）
 - ②浸出水処理システム（文献調査抄録）
 - ③しゃ水システム
 - ④施設構造
 - ⑤シート試験
 - ⑥シート施工
 - ⑦基盤整備法面施工
 - ⑧施設施工

■ 専門部会幹事抱負

◇建設部会として思うこと

建設部会幹事 山岡亮介

先般、本研究会設立後初の研究活動報告会が開催されました。

各分科会共、現状の問題点、研究テーマ等数多くの研究課題が提起されました。改めて、各業種の技術の組み合わせの多さに驚き、現状の深刻さを再認識するところでありました。

本研究会発足にあたって、発起人である花嶋代表を初め、田中・古市両副代表の現状を憂える呼びかけに、建設会社23社が賛同し、この1年間、16の分科会に各々わかれ、まず現状の把握、文献調査、アンケート調査、現地踏査等から鋭意進めてきました。

この1年間振り返ってみますと、会員間の技術格差も相当みられ、本研究会の目的の一つである自己研さんも重要なことと痛感しております。

本研究会の特徴は、異業種技術の横断的な交流

を深めることにより、トータル的な研究として実際に役立つ、安心できる最終処分場を求めることにあります。

この厳しい社会状況に答えるべく、一刻も早く対応できるよう、建設部会間はもとより、全会員が一致協力してゆきたいと願っているところです。

また、建設会社は一式請負の元請となる場合が多く、技術的な責任をヒシヒシと感じているところです。

◇最終処分場技術システム研究会
を進めるに当たって
しゃ水工部会幹事 上田滋夫

LS研の主旨は、我々を取りまく廃棄物問題について、業界の利害をこえて、より安全に、システム的に対応するか技術集団と理解し進めております。したがって研究会の内容については、LS研ニュースレターNo.1でもお分かりのとおり、現時点考えられる課題を各部会のメンバーが一緒になって研究していくもので、今までになかった見方ができ、其の成果は大いに期待して余るものがあるものと考えております。

しゃ水工部会の位置付けは、全体約100社で研究会は構成されておりますが、なんと45社がしゃ水工部会員です。此の数字でもお分かり頂けるとおもいますが問題意識は高く、其の責任は大きいものと認識しているところです。

特にしゃ水工部会員は、シートメーカー、材料メーカー、パイプメーカー、施工会社等、幅広い集団で其の知識、経験は此の研究会を進めるに当たって日に日に重要になってきております。

4月より研究が2年目に入ります。初年度は課題、研究計画が中心でありましたがいよいよ本格的な研究に入っていきます。

基本は、廃棄物を如何に安全に、安く処理する処分場建設に寄与出来る研究であるかが重要と常日頃考えております。御支援よろしくお願い申し上げます。

◇「最終処分場構造指針」を目指し
コンサルタント部会幹事 樋口壯太郎

LS研発足後、1年が経過しました。活動状況を観ると非常に活発ではあったが、会員が異業種で構成され、最終処分場に係わる立場が異なるため、会員が共通の認識をもつための活動が多かつ

たと思われます。また、幹事の力不足もあり、分科会の調整もうまくいかないところが多々ありました。しかし会員レベルの向上という点では得られた成果は大きかったと思います。本年度はこれを基礎によいよ本格的な研究に取り組んでいく訳ですが、我々コンサルタントの立場から、少し抱負を述べさせていただきます。現在、計画や設計の指針として「廃棄物最終処分場指針解説」がありますが、これには「構造」という文字がありません。焼却施設や尿処理施設はそれぞれ「～構造指針解説」になっていることにお気づきの方もあられるでしょう。これは多分最終処分場技術の歴史が浅く、構造指針とするにはあまりにも不確定要素が多かったからだと思います。だからこそLS研が発足したということもいえるでしょう。是非、「最終処分場指針」を「最終処分場構造指針」に昇格させ世の中の認知を受けたいと思います。そのためにはLS研の研究内容をより充実させる必要があると考えます。

◇より安全な最終処分場に向けて
水処理部会幹事 伊藤三郎

水処理部会に加入する13社は、すべてが水処理のプラントメーカーで、廃棄物最終処分場から発生する浸出水の処理に関する技術を多数保有し、プラントの納入実績も多い企業ばかりです。研究会の目的である最終処分場に関する技術の総合的研究を行うことに、当部会からも5つの研究分科会に技術者・研究者が参加し、他の部会からの参加者と一緒になって研究活動を行っています。研究会発足以来1年が経過して、それぞれの研究分科会でそれなりの研究成果をあげているようですが、今後さらに実のりある成果があげられることを期待しています。

浸出水処理の将来は、窒素除去、無機塩類除去、そして排水基準に新たに追加された規制物質である有機塩素系化合物や農薬系物質の除去など、増々高度化していくことは確かです。当部会は、これらの研究活動に参加し、より安全な最終処分場の建設、維持管理に役立つマニュアルまで作成することを目指しています。

会員の皆さんは、日常の忙しい業務の合間をぬっての研究活動参加で、時間的制約もありますが目標達成に向けてがんばっていますので、側面

から応援し、全会員が貴重な成果を等しく受けられるよう努力していきたいと考えております。

会 員

(1) 新規入会会員

- 1) 学識会員 今泉繁良 (宇都宮大学工学部)
- 2) 水処理部会
 - 浅野工事 (株)
 - エス・ケー・エンジニアリング (株)
 - 新日本製鐵 (株)
 - (株) タクマ

(2) 退会会員

- (株) 虎ノ門コンサルタンツ

以上により、平成7年4月現在での会員数は以下の通り。

学識会員	4名
建設部会	23社
しゃ水工部会	45社
コンサルタント部会	19社
水処理部会	13社
その他	1社
合計	4名、101社

編集後記

LS研も設立後1周年を無事迎えることが出来ました。4月に開催された定時総会、花嶋代表による基調講演、16分科会主査による発表会と午前10時から午後6時迄、その後の懇親会を含めると延々10時間におよぶ長丁場でしたが、それぞれ熱気につつまれ時間を忘れていた状態でした。終了後一度に疲れが出てきた次第です。

さて今年度はいくつかの分科会で試験も始まり、各分科会でも具体的な成果を求めて本格的な活動に入ります。皆さんしっかり頑張りましょう。

ニュースレターも1号を刊行してから4ヶ月がたちましたが、その間阪神大震災やら、オウムやらサリンやらなんとも劇的な4ヶ月でした。阪神大震災の被災者の方々に心からお見舞い申し上げます。一日も早く、目に付く青葉のようにさわやかに過ごせる日が来ることを念じながら〔TM〕